

## 2022年 夏季福音特別集会 第3回 愛（永遠の生命）

2022年8月28日（京都KKRくに荘）

奥田 昌道

開会の祈り 汝ら幼児の如くならずば 一切新しくなりたり クリスチャンたちはみな  
モデル 御言は既に成就している 上にあるものを求めよ 翔ちゃんと衡平君 地上に  
送られた最後の切り札 春雨型と集中豪雨型 互いに相愛しなさい 神は愛なり 弁慶  
の仁王立ち 私たちは二重国籍者 愛の讃歌 祈り

### ●開会の祈り

第3回目の最後の集會に導かれたと思います。始めに短くお祈りを捧げます。

主さま、それぞれの所から兄弟姉妹をあなたがこの京都の地にお招きくださいます、昨日、本日とわずか一泊二日の集會でございますけれども、あなたが本当に御言・御霊をもって私たちに臨み、包み、担いあげ、そしてお祈りくださったことを感謝いたします。

「人が生きるのはパンだけではない。神の御口みくちから出る一つ一つの言葉で生きる」

と、あなたは仰いました。そしてまた、

「活かすものは霊であって、肉は役立たない。私が語った言葉は霊であり生命である」

と、まことに霊言、霊の言葉をもって私たちを養ってくださいました。そして、あなたは弟子たちとのお別れに際して、

「私は平安をあなた方に遺のこして行く。私を与える平安はこの世が与えるようなものではない。あなた方はこの世ではいろいろな患難がある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている。」

と、そのように弟子たちを励まして、あなたはあのゲッセマネの祈りを経て、十字架にご自身を献げてくださいました。

「わがこと終わりぬ」

と仰った時に、すべてが成就じょうじゆいたしました。そして、あなたは陰府よみにまで降くだって、そこで苦しんでいる人たちを救い上げて、あの栄光のお姿で現れてくださいました。

主さま、そういう死んでも死なない生命、本当の生命があなたのご復活を通してあらわされました。弟子たちはあのペンテコステの時に、あなたからくださった火によって、新しく生まれました。そこから本当の生命が展開していきました。どうぞ、私たちも旧い我らを



脱ぎ捨て——いや、あの十字架で既に、

「我既に十字架で葬られたり、もはやわれ生くるにあらず。復活されたキリス

トの生命、御霊の生命をいただいたいて、われ主と共に歩むなり」

と。そういう心意気をもつて、この霊の次元、高き次元を歩ませられて行きとうございます。

主さま、無条件であります。主さま、あなたの前にぶつつぶれて、

「主よ！」

と御名を呼ぶ時に直ちにあなたは来たりたもう。主さま、そして、担いあげ救いあげ、

「見よ、世の終わりまで我なんじと共にあるなり」

と、お一人お一人に語りかけてくださる主さま。あなたに在るなら、常に勝利であります。

主さま、どうぞ、この最後の集会において、あなたのお姿を現してくださり、一人ひとりを強め、

「われ世の終わりまで汝と共にあるなり」

と、本当にあなたの御言は一人ひとりに語りかけられています。

「わが言は霊なり、生命なり。我を信する者は死すとも生きん。おおよそ生き

て我を信する者は、永遠とこしえに死なざるべし」

と、そこまで仰つてくださった主さま。ありがとうございます。私たちはただあなたの恵みを受けるだけ。天から雨が降ってきます。その雨をただ受けるだけ。太陽が天から我らを照らしてくれます。その光を、生命を浴びるだけ。主さま、すべてあなたが備えてくださり、あなたが

「受けよ！」

と言われて、私たちは

「いや、こんな汚い自分には受けられません」

「そんなことは言うな。十字架で全部片づけた。十字架で旧き汝は既に死んでいる。

私の復活と共にあなたも甦ったんだよ」

と。復活の生命、永遠の生命、それを我々に与えんがためにあなたは来てくださいました。ありがとうございます。主さま、幼児おきなこの心をもつてただ、ありがとうございますと受ける他に何もごんごいません。

主さま、どうぞ、この最後の集会において、あなたご自身を現して下さり、

「おそ 懼るな、我なり。懼るな、心安かれ」

と、あの湖の上を歩いてこられたあなたが、漕ぎ惑う弟子たちに対して励ましを与えられた。そのように、どうぞ、今ここに最後の集会において、まだ解決されていない問題をかかえている兄弟姉妹がありますならば、その一人ひとりにあなたの手をお按いて、

「我なり、懼るな、心安かれ。我既に世に勝てり」

と、本当にあなたご自身をお一人お一人に現して下さるようお願いいたします。



始めに当たりまして、この切なる感謝、讚美、祈りを兄弟姉妹の熱き祈りと共に今、尊き主イエス・キリストさまの御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン。

● 汝ら幼児の如くならずば

皆さん、ありがとうございます。本当に私たちは地上を歩きながら、天国を歩いているんです。天上の旅人です。それは思われたる事実ではない。霊的現実です。目には見えなけれども、これが本当の現実なんです。それをキリストは私たちに与えようとして来てくださった。本当にそのことを思えば、私たちは「ありがとうございます」と、それ以外に言葉はないんですよ、

「ありがとうございます。本当に、主さま、ありがとうございます」

と。キリストは天の高みに神と共に居られた。ヨハネ伝の一番最初にありますように。ところが、この地上にまで下って、人の子の姿をとって、そして、いろんな悩み苦しみをぶさに味わって、最後は十字架にかかって、一切の問題を引き受けて、そして一旦、陰府よみに降くだられた。しかし、陰府で苦しんでいる者を抱き上げ、抱きとって、あのご復活の姿で、栄光の姿で現れてくださった。まさに、

「我既に世に勝てり」

という、霊的現実をご自身の存在をもつて現してくださいました。それを受けとれと。私たちは受けとるだけです。何か自分の側ですることは何もないんです。

「いや、私のようなものは、私のような汚れたものは……」  
なんて絶対言わせない。

「十字架で全部片づけたではないか。この十字架の贖いを受けとれよ」

と。我々はただ受けとるだけなんです。それが幼児おさなごの心です。昨日も申し上げました。小池先生は、

「破れだよ、砕けだよ。破れない私のために、キリストは破れてくださった。砕けない頑かたく々な私のために砕かれてくださったんだ」

と。すべてはそうやって、ご自身の中にある永遠の生命、死んでも死なない生命、天上の生命、それを与えるためにわざわざ来てくださった。そして、一切を担って、あの十字架を通して凱旋された、栄光の姿で天にのぼられた。そして、

「祈って待っていないさい。聖霊の火をくだすから」

と。お約束通り、あのペンテコステの時に聖霊の姿で弟子たちに臨み給うた。そこから弟子たちは生まれ変わって、新しい伝道に乗り出して行った。それは過去の話ではない。今現在、我々に対しても同じなんです。神さまにあつては、過去も現在も未来もみな一つです。

それをキリストは何も条件を付けられなかった。無条件、絶対です。無条件、何も条件を付けておられない。「絶対」というのは、相手がどのようなものであろうと、そんなこと



は問題としないというのが「絶対」なんです。「相対」というのは、善いやつには善いものを与え、悪いやつには罰を与えるという、相手を見てそれぞれそれに報いるというのが、普通の世界ですね。しかし、それを乗り越えて、

「善き者にも悪しき者にも陽を昇らせ、直き者にも直からざる者にも雨を降らせ給う。汝ら天の父の全きがごとく全かれ」

と仰った。それを自分の努力でやろうと思つたら、苦しい。

「私はお前をそのようにしてみせるから、私に信頼しろ。私に任せておけ」

と、これが主さまの言葉なんです。だから、クリスチャンは自分に頼らない。自分なんかどうでもいい。

「われ既に主と共に十字架につけられたり。もはやわれ生くるにあらず。復活のキリスト、御霊のキリストわがうちにありて生き給うなり」

と。その「わがうちに」というのは、一旦死んで、キリストからいただいた新しい生命、その中に主は生きて働き給う。そういうところを我々は歩まされている。ただ、それは目に見えない。

「見えないものを然りと受けとつていくのが信仰だと、昨日申しました。

「信仰とは望むところを確信し、見ぬ物を真実とする」

と。「望むところ」も勝手な望みではない。御言に基づき、御約束に基づいて、望むことがゆるされている。それを

「ありがとうございます」

と、まだ起こっていないことを現在既に得たりとして、信じて歩んで行く。これが我々の生活パターンなんです。それをキリストは、

「ああ、その通りだよ。幼児のように、君は私の言葉を真剣に受けとつてくれたね。

私はうれしいよ」

と。キリストが喜んでくださるのは、

「はい、ありがとうございます」

と言って全面的に主の御言を受けとつていく、そういう姿ではないでしょうか。それが幼児の心なんです。幼児は、うれしい時はうれしい、悲しい時は悲しい、泣く時は本当に大声で泣く、わめく。

「汝ら幼児の如くならずば、天国に入ることあたわず」

と、キリストは仰った。イエスご自身が神さまの幼児なんです。

「自分からは何もできない」

と仰っているでしょ。小池先生は

「無者キリスト」



と仰った。自分は空<sup>から</sup>つぽだと。その空つぽのところへ天の神さまが、父なる神さまが100%に宿られた。だから、キリストは、

「私を見た者は父を見たんだよ」と仰った。

「私は自分からは何もできない。しゃべることは自分からは何もない。全部、私の中で父なる神さまが御業<sup>みわざ</sup>をなさっているんだ」

と。それで、ユダヤ人たちは、

「彼は自分を神と等しい者にした。けしからん」

と言って、審いたけれども。イエス・キリストにとっては、父なる神さまは全<sup>すべ</sup>てなんです。我々は「我<sup>が</sup>」というやつがじゃまします。我で苦しみます。もしも何か善いことがあつたら「それは私がやりました」と誇る。うまくいかなければ、しょぼんとしている。それが普通の人間の姿ですけれども、

「そんな人間の生<sup>な</sup>まの姿を全部、十字架で引き受けたよ。自我という神さまの恵みを受けるのをじゃまして、そういう存在は全部私が十字架で片づけた」

と。それをパウロはすっかり受けとつて、

「われ主と共に十字架につけられたり、もはやわれ生くるにあらず。復活されたり」  
たキリスト、御霊のキリストが新しく生まれた私の中に生きてありたもうな

と、そう言っているんですよ。ああいうパウロの告白を全部、

「あつ、これは私の告白なんですよ。ありがとうございます」  
と、そうやって皆さん、受けとつてください。

常識にとらわれたらダメですよ。常識でいくならキリストは必要ない。我々の常識とか何とか、そういうものでがんじがらめで苦しんでいる人間を、キリストは

「十字架で全部引き受けた。全部引き受けたんだよ」

と。そして、ご自分がそのマイナスを全部引き受けられた。そして、あのご復活の栄光の姿、聖霊、そういうプラスを私たちに下さった。それはキリストの十字架を通つて、ご復活され、聖霊となつて降つてくださる、その主の恵みなんです。福音書の言葉はみな恵みの言葉です。

### ●一切新しくなりたり

福音書の書かれたあの内容というのは、まだキリストが十字架にかかれる前のことが語られている。しかし、私たちはもう十字架にかかられ、贖罪<sup>しよんぐざい</sup>の御業<sup>みわざ</sup>を全うして下さり、そしてあの栄光の姿で現れ、天に昇られ、そして今度は、ペンテコステの時に聖霊となつてくだつて来て、弟子たち一人ひとりの中に火を燃やされた。そういう霊的現実を私たちは、今いただいているんです。これからではない。今もう既に我々はその中にいるんですよ。



そのことを、「ありがとうございます」と言っただけで受けて。私たちが側で『ありがとうございます』以外に言葉はあるんですか?」

と、昨日聞きました。

皆さん、今朝、爽やかに目覚めになったと思います。

「ありがとうございます」

と仰いましたか。「ありがとうございます」というのは、「有ることが難しい」、簡単な話ではないという。寝ている間に呼吸が止まったら、それで終わりですよ。朝目覚めたというのは、

「ありがとうございます。朝、目覚めることができました。あなたのお護りのおかげでございました。ありがとうございます」

と。私は歳とつたせいか、何でも「ありがとうございます」がすぐ出てくるんですよ。確かに、昔に比べたら、肉体のあらゆるところに問題を抱えていますから、歩行困難、背中が曲がっている。いろいろあります。言い出したらきりがありません。そんなもの乗り越えているのが福音ですよ、キリストの生命は。こんな生身の人間が永遠に生きるなんて、キリストは仰っていない。

「この百年たらずの間に本ものを受けとれ」

と。本ものを受けとったら、もうそれでまあ今の肉体は用を果している。それくらいの意気込みで、皆さん、

「そこらの青年に絶対負けないよ、内に燃えるものがあるんだ」

と、それを実証していく。それは皆さんのご自身の中のキリストが実証してくださいるので、何か自分にこだわる必要はないんですよ。

「善きものにも悪しきものにも陽を昇らせ、直きものにも直からざるものにも

雨を降らせ給う。それが父の御意だ」

と。そういう神さまと同じように、

「天の父の全きごとく、全かれ」

とキリストは仰った。そんなことはとても、自分の肉の思いではできません。だから、「心配するな。あなたの肉なる思いなんて全部、十字架で片づけた。新しいお前を創り出したのは私だ。その新しいあなたを導くのは私の役目だよ。今までは、旧いあなたはどうしても我というやつがじゃまをして、どうにもならなかった。それを全部、十字架で片づけた。あなたはもうすっかり新しくなっただよ」と。

「一切新たに成るなり。旧きは過ぎ去った。視よ、一切新しくなりたり」

と、コリント前書に出てきますように、そういう新しいあなたが生み出された。その新しいあなたが聖霊という霊を送ってください、御言を糧として喰らっていく。そして、何かといえば、祈り心になる。そういう新しい生活が始まった。それを素直に実践していけば、



それでいい。何か立派な証あかしをせねばいかんとか、何かせねばいかんとか、そんなことはない。

「ゼロ・イコール・無限大」(0||∞)  
と、小池先生は仰った。普通、人間はゼロになれない。

「ゼロになれないあなたを十字架でゼロにしたよ」  
と。十字架はあなたをゼロにしてくださいました。ゼロにして放っておけば、変な霊がきたら困るから、聖霊という神さまの霊が中に入ってくださいって、

「視よ、一切新しくなりたり。もはやわれ生くるにあらず、御霊のキリストわがうちにありて生き給うなり」

と。そういう霊的な、目には見えない霊的現実を現してくださいっているのが、福音書、パウロの書簡、そういうものなんです。それをそのまま素直に

「ありがとうございます」

と受けとっていくのが私たちの姿であって、それ以外は何も求めておられない。

誰が一体、聖書を難しくしたんですか？ 誰が一体、キリストの言葉を難しいものにしてあげたんですか？ もしも、教会がそういうことをやったとしたら、それは大変な責任です。キリストは、

「あかひ幼児の心で受けとれ。神の国は幼児たちのものである」

と仰った。大人みたいに何か恰好をつけて何とかぶっているような、そんなのではないよと。それを小池先生は、

「破れだよ。破れを破れとして受けとりなさい。砕けだよ。砕け得ないあなたのためにキリストは砕かれてくださいましたんだ」

と言われた。先生の神学は「砕けの神学」といいます。砕け得ない者のために十字架で砕かれてくださった。それはあなたのためなんだよと。そうなんです。もう十字架で全部片づけられたんです。十字架で死につばしではない。あの栄光の姿で復活なされた。「復活」と言われているけれども、あれはキリストの本当の姿が現れただけです。そういう姿の中に私たちを抱きとって、

「見よ、一切新しくなりたり」

と。福音書を読んで、あるいはパウロの書簡を読んで、燃え立つものがある。それが本当の読み方ではないですか。素直にそのまま「はい」と言って受けとったら、そこにキリストの霊が働く。そういう本当に単純な、素直な、幼児の心でキリストの言葉を、パウロの言葉をしっかりと受けとって行く。

「ああ、ハレルヤ！ いつでもあなたのご自由を私をお使いください。お用いください。いつでも、もし天国へ行く時期がきたら、どうぞ、私を抱きとって、天へ連れて行ってください」



と。全部、おまかせ。そういうのが私たちの歩みでしょ。それはこの世の常識からしたら、とんでもないことかもしれませんよ。でも、

「われ既に世に勝てり」

と、キリストは仰つてくださった。

「汝らはこの世にては患難あり。されど雄々しかれ。われ既に世に勝てり」

と、これがヨハネ伝16章のキリストの最後の言葉でしょ。

### ●クリスチャンたちはみなモデル

そして、17章であの大祭司の祈りが出てくるわけです。

「永遠の生命とは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたがお遣わしになったキリスト、これを知ること、信受、体受することでありませう」

と。「知る」というのは、「肉体的に一つになる」という、それくらいの意味なんです。「知る」というのは、一つになること。

「ありがとうございます」と。皆さん、それ以外に何かあるんですか。それを本当に生活の中で現していく。それが証なんですよ。ペラペラしゃべるのが証ではない。いや、ペラペラしゃべる証もそれは結構でしょうけれども、生活そのものが証です。

子供の姿がそうでしょ。子供は本当に、泣きたい時は大声で泣く。うれしい時はケラケラ笑っている。何がいいことがあったら、

「おかあちゃん、おかあちゃん。聞いて、こんなことがあったよ！」

と、喜び勇んで帰ってきて抱きつく。それが幼児の姿です。私たちは、本当に主にある幼児なんです。御言・御霊、そういう霊の糧をもつて我々を養ってください。そういう単純なところへ、皆さん、帰ってくださいね。

大体、人間は幼児の頃は単純率直で喜んでいたのが、青春時代になると悩みだして、それから社会に出ると、いろいろ難しいことがいっぱいあるから、それで散々苦労して、やつと白髪になる頃になったら、幼児に戻ってくる。それが人間の常です。しかし、そのままだったら、それで終わりです。しかし、そういう白髪の――私もそうですけれども――老人の中に燃えているものがある。生命が宿っている。これを実証するのが老人の仕事です。そんなことはほとんどマスコミなんかには出てこない。

「やれ社会保障をどうしよう、年金問題をどうしよう」

と、そういうこの世的なことを政治家たちは一生懸命に考えてくる。なにも我々はお金をいただいて、百歳の天寿を全うして、

「めでたし、めでたし」

と、そんなのではない。百歳まで生きるのは結構だ。しかし、  
「その中に生命が燃えているよ」



と、これを現していくのがクリスチャンの仕事です。それもキリストがなさってください。キリストに全部、明け渡せば、キリストが全部なさってください。イエスご自身も、

「われ自ら何事をもなしあたわず。私が言うことは何ものもない。全部、父なる神さまが私の中で御業をなさっているだけだ」

と。そうキリストはヨハネ伝の4章、5章あたりで言っておられる。それを小池先生は「無者キリスト」

と言った。キリストは神さまの前に「0」だ。ゼロの中に神さまという「100」(∞)が入ってきた。だから、

「ゼロ＝無限大だ」(0=∞)

と。ところが、人間はゼロになれない。自我というやつが邪魔して。その邪魔している自我を十字架で片づけた。

「汝、問題なし！」

「はいっ、ありがとうございます！」

「そうだよ」

と。単純率直にそういうキリストの贖いの恵みを受ける。贖っただけではない。聖霊という新しい霊を送りこんで、新しく生まれた私たちを身親しく導いて、そして天の高みへと引き上げてくださる。これがキリストの恵みでしょ。それを受けとったら、本当に嬉しいですよ。

「喜べ、喜べ。天における汝らの報いは大いなり」

と。キリストは迫害されることに對しても、そうやって、

「喜べ、喜べ。わが名のためにあなた方は誇られるならば、それは嬉しいことだよ」

「だよ」

と、言ってくれました。パウロも

「喜べ、喜べ」

と。ピリピ書なんかそうですね。喜びの音信ですおとずれね、パウロのピリピ書なんて。なにも難しいことを言っていない。イエスさまに全部任せようではないか、キリストは全部やってくださっているんだよ。それを本当にしっかりと受けとったらい。普通、人間は自我があって受けとれない。そんな自我というのは十字架で全部片づけた。

「ああ、ありがとうございます。どうぞ、100%に宿ってください。そしてあなたの御業を現してください」

みわざ

と。これがクリスチャンの祈りでしょ。何も難しいことはない。それを本当に日常生活の中で実際やらなあかん。「やってみせな！」とありましたね(笑)。

「やってみせ、説いて聞かせて、やらせてみ。褒めてやらぬと、人は動かぬ」

とかいう言葉がありますけれどもね。



だから、クリスチャンたちはみなモデルなんですよ。モデルとして神さまからつかわされ、キリストからつかわされ、一人ひとりがどういうお方であろうと、いろんなパターンの人があつていい。どのお方においても、共通に働いているものがある。キリストの霊がある。そして、どのお方からも発している栄光の輝きがある。キリストがそうやってお用いくださる。いろんな人たちがいるからいいんですね。そういう人たちを通して栄光を現したもう。そういう単純率直な世界の中に我々は導かれている。そういう自覚を皆さん、どうぞ、お持ちくださって、

「私なんか、私は信仰がうすい」

なんて、そんなことは一切なしですわ。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生きるにあらず。御霊のキリス

ト、復活のキリストわがうちにありて生き給うなり」

と。それが単にパウロさんだけではない。皆さんお一人お一人がその通りなんですよ。

「私が言いたいことをパウロさんがちゃんと言ってくれてくれるんですよ」

と。そうやったらいい。まあ、訴訟の時は、「書証第何号」とか言って、いろいろ証拠を出すんですけれども、我々は証拠として出すのは、みなキリストの言葉、パウロの言葉、これを全部出して、

「はい、これを私の言葉として援用いたします」

と(笑)。そういうことで、普通の人とは違う世界を私たちは生きていく。それが我々の証<sup>あかし</sup>ではないですかね。そして、それを持ち寄って、みんなで神を讃え主を讃美する。それがこういう特別集会ではないでしょうか。皆さん、本当に単純率直に主を喜ぶ<sup>よぶ</sup>ことです。

「われ主を喜ぶ」

という、そういう生き方を実際やっていただきたいと思えます。

### ●御言は既に成就している

今日は、プリントで言いますと、「夏季特別集会のために」というプリントの最後のところの時計文字のIV、「第3回集会」「愛」(永遠の生命)とあります。キリストの「愛」というものと「永遠の生命」というのは、これはもうワンセットでありますから。

私は昨日から宿でいろんなことを思っている時に、あの文部省唱歌の「われは海の子」というのがありますね。あれを思い出すと楽しくなってきた。あの歌詞の2番に、

「生れてしおに浴<sup>ゆあみ</sup>して

浪<sup>なみ</sup>を子守の歌と聞き、

千里寄せくる海の気を

吸いてわらべとなりにけり。」

とある。そこで歌われている、「海の気を吸いて」、御霊の気をいただく。御霊によって洗わ



れる。それが私たちの姿です。ああいうすばらしい唱歌を口ずさむにしても、そこに御霊が働いてくださると、全部、変貌変質していくんです。そんなことを昨日の晩から思いました。

「生れてしおに浴<sup>ゆあみ</sup>して」

海の水でゆあみ、からだを洗われた。我々は聖霊という生命の水で洗っていただく。

「浪<sup>なみ</sup>を子守の歌と聞き」

御言・御霊というものを子守歌にしてきた。そういうふうには全部読み替えていくわけですよ。そうすると、あの歌は本当に素晴らしいですよ。

「千里寄せくる海の気を」

聖霊という気を吸い込んで、そして

「吸いてわらべとなりにつけり」

わらべとなつてきた。赤ちゃんから少年へと変貌してきた。それがあの「われは海の子」という歌だと思う。そういうふうには、いいものはどんどん受けとって、それを変質変貌させて神を讃美する。それが我々の日常生活だと思う。

そういうことを率直に告白なさったら、

「ああ、この人はちよつと変わった人だなあ。変人ではない。素晴らしい人だな」

と、こうなつていくわけで、少しは変わったところがなかったら、人は気づいてくれませんよ。まあそんなことを思いながら、昨晚は過ごしました。

それで今日は第3回集会で、プリントによりますと、「愛」(永遠の生命)です。ヨハネ伝3章16節。ここにあげましたところを順次見ていこうと思います。ニコデモとの話が終わつたあとで、十字架のことが出てくる。13節、

「<sup>13</sup>天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。<sup>14</sup>モーセ荒

野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。

これは十字架ですね。そして、

<sup>15</sup>すべて信する者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり』

もう既にあの十字架のことがここで示されているわけです。そしてその次に、

<sup>16</sup>それ神はその独子<sup>ひとりご</sup>を賜<sup>たま</sup>うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡

びずして、永遠の生命を得んためなり。

ここも一般論として、

「ああ、神さまは独子をこの世界<sup>たまわ</sup>に賜<sup>たま</sup>つたほどにこの世界を愛して下さつたの

だ」

なんて思わないで、

「神さまはその独子である御子キリストを、あなたに賜<sup>たま</sup>つたほどに」

と。これからのことだから「賜<sup>たま</sup>うほどに」とあるけれども、我々から見たらもう賜<sup>たま</sup>つたん



です、実現したんです。そうでしょ。それは何のためか。そのお方を信ずるあなたは、もう亡びないで永遠の生命を得るため、もう既に永遠の生命はあなたの中に宿って、光り輝いているんだよと。だからこれは、

「ありがとうございます。この御言は私の中で既に成就してくださっていることを感謝いたします。ありがとうございます」

と、そういつて読んでいかないと、ここを読んでいらないことになりませんよ。

そうですね、皆さん。過去に語られた御言が既に成就している。福音書は全部、イエスが十字架におかかりになる前のことが書かれているでしょ。終わりの方に復活されたことが出てきますけれども、そこまでの話は全部、まだキリストが十字架におかかりになる前に語っておられる。我々はもう既にそこで語られているようなことは、

「全部、十字架を通って復活されたキリストによって実現した、成就した」

と。こうやって読んでいかないとね。そうでしょ。だから、

「神さまは御子キリストをあなたに賜ったほどにあなたを愛してくださいました。そのお方を信じているあなたは亡びないで既に永遠の生命を得ているんだよ」

と。こう読まないでね。そうでしょ。御言はあなた方お一人お一人に語られている。

「私が語った言葉は霊であり、生命である。肉なるものは役に立たない。活かすものは霊であって、肉は役立たない。」

と、キリストは仰った。

「私が語った言は霊であり、生命である」

と、ヨハネ伝6章63節のところに出てきます。福音書はこれからのことが書かれている。私たちは既に成就したその中に入れられている。そういう角度でしっかり受けとっていく。だから、ここを読んでも、

「あつ、ありがとうございます。あなたは御子キリストを私のために遣わしてください。さつたんですね。そのようにあなたのご愛というのには抽象的な愛ではない。御子キリストを私に賜るといふ、そういうご愛でありました。ありがとうございます」

と。そして、そのお方を体で受けとる。信受する、体受する。

「その者には既に永遠の生命は来ているんだ。それを感謝、讚美しなさいね」

と。ありがとうございますと。

皆さん、そのように読んでおられますか。なるほど、歴史的には、福音書はこれからイエスが十字架におかかりになる前のことをつらつらと書かれています。しかし、我々は既に成就したそれを受けとっていくという、そういう読み方をしていかなければ、本当の力にならないでしょ。しかも、どれもこれも、あなたに対して、あなたとの係わりで語られている。イエス・キリストの御霊の言をそういうものとして受けとっていく。

「私が語った言葉は霊であり生命である。活かすものは霊であって、肉は役立」



たない」

と、キリストは仰った。「肉」というのは、生まれながらの自分の姿が「肉」です。「霊」というのは、十字架で贖われて、新しく生まれ変わった、キリスト中心に生きていく、そういう在り方、これが「霊」です。そういうキリスト中心に生きていく。旧い我はもう十字架で片づけられている。そういう者に対して生命の言が語られている。それを栄養素として成長していく。そういう在り方が私たちの在り方でしょ。

「私たちの側すべきことは、『ありがとうございます』と言う以外に何がありませんか？」

と昨日も申しました。全部、キリストがやってくださったんですよ。そして、

「わがこと終わりぬ。わが霊を御手に委ねます」

と、これがキリストの最後の言葉でしたね。「わがこと終わりぬ」とは、

「全部やりました」

ということ。だから、クリスチャンがよく悩んでいたたりしたら、申し訳ないんです。

「これだけのことをあなたのためにやったのに、それをなぜ受けとってくれないの？受けとってくれたら、私はうれしいんだよ」

というのがキリストの心だと思いませんか。クリスチャンはもともと喜びに輝いていて当たり前だと思う。何か自分のいろんなことにこだわったり、心配したり、後悔したり、そんなことでせつかくの永遠の生命から発する喜びが塞ぎこまれていて、蓋をされている。そんなものは全部取っ払って、

「主よ、御名を讃美します。主さま、あなたは私のために全てをしてくださった。ありがとうございます。もはや旧い私は生きていません。私は十字架で、あなたと共に十字架で死んだものです。しかし、死につばしではなかった。あなたの生命が私の中に宿りました。ありがとうございます」

と。

### ●上にあるものを求めよ

それを言っているのはコロサイ書3章です。コロサイ書を見てください。そこに語られていることは全部、あなた方ご自身のことが語られている。そうやって受けとらないとね。

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、

キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。汝ら上にあるものを念い、

地に在るものを念うな、」（コロサイ3：1）

「あなた方は既にキリストと共に甦ったんだよ」

と、出だしからそう書かれています。

「あなた方は既にキリストと一緒に甦ったのだから、そうになると、上にあるものを、



天にあるものを求めていくのが当たり前だよね」

「はい、その通りです」

と。キリストは向こうで、そこにいらつしゃって——ローマ書8章にも出てますね、キリストがそういうところで

「善きものを賜るぞ」

ということが8章の終わりの方に出てきましたけれども——ここでは、キリストはそちらに居られて、そしてあなた方を見ておられる。だから、あなた方は既に、旧いあなた方は、もう死んだのだから、上にあるもの、天なるものを思い、地にあるものにはもう縛られないよと。

「<sup>3</sup> 汝らは死にたる者にして」

とあります。「死にたる者にして」と、御言はそう宣言している。

「旧いあなたは十字架で死んでいるんだ」

と。では、死につばなしですか。とんでもない。復活の生命をあなたにくださった。復活の生命をいただいて新しく生まれたあなたが、今度は御言・御霊を糧として成長していく。「われは海の子」みたいなものですね。

「生れてしおに浴して

浪を子守の歌と聞き、

千里寄せくる海の気を

吸いてわらべとなりにつけり。」

それは、

「御言・御霊を吸い込んで私は成長していきます」

ということですね。だから、

「汝らはもう既に十字架で死んだもので、あなたの本当の生命はキリストと共に神さまの中に隠されている。それは肉体では見えない。肉の目では見えない。でも、その生命は隠されてあるんだよ、大丈夫だよ、喜びなさいよ」

ということですよ。

「喜べ、喜べ」

と何度も出てきますわね、福音書にもパウロの手紙にも。クリスチャンはもつともつと喜びに輝いている姿をなんとか表して、そして世の人たちが、

「ああ、あの人は歳とつてヨボヨボなのに、あんなに輝いている。喜んでる秘密はどこにあるの？　なんか何百万円か誰かからもらったんじゃないのかね？」

なんて（笑）。家宅捜索しても何も出てこない、というようなもんですわ、我々は。

「汝らは既に十字架で死んだもので、本当の生命はキリストと一緒に神さまの中に隠されてある」



ところが、これから後にこのキリストが現れてくださる。まあご再臨の時でしょうかね。その時にあなた方も栄光のうちに現れる。私のイメージでは、なにもその終わりの時まで待たなくてもいいんです。我々はこの地上を去ったら、キリストが直ちに迎えてくださる。輝く姿の栄光のキリストが、

「よく、来たね。よう頑張ったね。あんたは地上ではいろいろなハンディを背負っていた。しかし、あなたはくじけないで本当に常に前向きだったね」と言ってくくださる。

●翔ちゃんと衡平君

私は、翔ちゃんや衡平君のことを思うと、いつもそれを思うんですよ。特に衡平君なんて二言目には、

「楽しいね」

と言うんです。何も出来ないあの子がいつもニコツとして、まず言うのは、

「おじいちゃん、手を持ってー!」

と言う。だから、「テモテ」と言うんです。

「手持って」

というから、「テモテくん」なんです。そして「楽しいね」と。何も出来ないあの子が指でマウスをいじって、そしてパソコンを駆使して、実に豊かな世界に彼は生きていました。そして、誰が来ても喜んでいました。とにかく人が訪ねてくれるとうれしいんですよ。それが衡平君の姿でした。

そういう幼児の心。本当に私は衡平君からいろんなことを教えられました。いつも別れて帰る時には、

「今度来るまで元気できてね」

と、それが私のお別れの、心の中で「アフビードゼーン」「また逢う日まで」という、そういう思いで去って行ったんです。

その衡平君は今も私の中で生きてくれています。翔君も衡平君も私の中で生きています。そしていつも聖国を示してくれるんです。翔君と衡平君だけではない。ミヤビ君というお友達のワンちゃん「介護犬」、それも一緒に天国にいます。そして、そこに私の妻の幸子もいますよ。それが私にとっての天のイメージです。そして、

「私もまたすぐに行くからね」

という、そういう感じです。ええ。私は地上では一人住まいを続けていますけれども、天上にそういういった私の親しい方々がいつも見えてくれる。私のために執り成してくれている。そういうことを思っているんです。はい。だから、天上の世界と、地上を歩む私の世界とはピタッと一つになっているんですよ。



お年寄りでそういう人がいらつしやるでしょうか。年をとるということは、今まで出来ていることが出来なくなる。すべての面でマイナスがふえてくるんです。そういうことだけを見ていると、嘆かわしいかもしれません。でも、我々にとっては、

「外なる人は破れども、内なる人はいよいよ新たなり」

という、そういう気概を持っています、私は。かつて出来たことが出来なくなっていく。それが年寄りです。でも、

「外なる人は破れども、内なる人は日毎に新たなり。我々は見えるものではなく、見えないものに目をそそぐ。見えるものは一時的であって、見えないものは永遠に続くのだ」

という、あのコリント後書4章のああいった言葉は全部、私にとってはリアリティなんです。

小池先生はよく仰った、

「聖書は教訓の書ではない。ドラマだよ」

と。それは皆さん一人ひとりにおいて展開していく神・キリストのドラマです。その脚本といえますかね、それが聖書だよと。先生はそういう受けとり方をなさった。

人それぞれみな違うでしょう。一人ひとりみな違う。しかし、共通しているものは、御霊の光が輝いている。御霊の生命が生き生きと生きています。そういう姿。私たちはそういう姿で生きていくことが「証人<sup>あかしびと</sup>」ということではないでしょうか。キリストの幼児<sup>おきなご</sup>、そういうことでありたい。そう思いますね。

そういう自分たちは、このコロサイ書3章の3節、4節に、

「其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なるキ

リストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」

我らの生命でありたもうキリストが現れてくださるとき、私たちもキリストと同じ栄光の姿に変貌して、そこで親しい者たちと共に、また主キリストと共に、永遠に住まうのである。それが私たちのいただいている霊的現実ではありませんか。

「見えるものは一時的であり」

そうですね。地上の生活は、頑張ったって百年なんです、今のところは。そうすると、日毎に短くなっていくわけです。それだけ見ていたら、悲しいかもしれません。けれども、にもかかわらず、キリストの世界は

「ごっこい、そんなことではへこたれないよ」

と。「されど」と言つて、全部引っくり返して、御名を讃えつつ生き生きと生きていく。そういう原動力となつてくださるのはキリストご自身です。そういう単純率直な生き方をもつてキリストを讃美する。小池先生は仰った、

「人生の目的は神を讃美することにある。人生の目的は神讃美である」

と。初め私はピンと来なかつたんですよ。



「いや、他にもっともつといろいろな目的があるんじゃないの？ 学者は学者らしく、それぞれの職業において何か表すものがあるんじゃないの？」

と、そのように思いましたけれども、先生は、

「人生の目的は神讚美だ」

と仰った。つまり、どういう仕事に携わろうと、どういう境遇にあらうと、それぞれの境遇の中で常に神を讚美する、キリストを讚美する、そして喜んでいる、そして「ありがとうございます」と言つて主を讚えていく、そういう姿だよと。

衡平君がその姿を表してくれたんです。私にとつては、衡平君というのは人生のお師匠さん。そういうつもりで、衡平君の写真をいつも食卓に飾っています。それと衡平君の面倒をみてくれた妻、幸子。これも素晴らしい魂でしたよ、本当にね。だから、そういう天国を表してくれた衡平君と、衡平君のお守りもをしてくれた幸子姉妹、その二人の写真がいとも私の食卓に飾つてある。それを見るたびに、

「ああ、そうだ、本当にありがとうね」

という、そういう気持ちですわ。

皆さん、いかがですか？ 皆さんの日々の生活で、

「ありがとうございます」

といつも仰つていますか。いやいや、段々そうなりますよ。年をとるということは、肉体的な面では、いろんなものがかつて出来ていたことが出来なくなっていく。そういう面で、一面では悲しいことかもしれない。でも、そこを見ないで、

「にもかかわらず、主よ、あなたは過去にまさる喜びを既に与えてくださっています。本当に聖国は近いです。ありがとうございます」

と、そうやって御名を讚えていく。それでいいんじゃないですか。

「我は道なり、真理まことなり、生命いのちなり。誰にても我によらずでは父の御許みもとに往くこ

とあたわず」

という。

「私を通れば誰でも往けるよ」

「そうなんですか？」

「はい、そうだよ」

「いや、私みたいなやつが……」

「そんな『私みたいなやつが』と言わせないので十字架だよ。十字架で旧いあなたはまだ葬り去られている。『われ主と共に十字架せられたり』と、十字架せられて生きている人はいないからね」

「では、死につばしですか？」

「とんでもない。もう旧いあなたは葬り去られて、復活の生命、キリストのあの霊



があなたの中に宿っているんだ。だから、あなたはもう永遠の生命を与えられて  
生きている。あなたの中には御霊の愛が宿っている。それがあなただよ」  
と。それが今日の主題ですね。

### ●地上に送られた最後の切り札

プリントに第3回集会「愛」（永遠の生命）とあります。御言はまず今、ヨハネ伝3章16節  
をみました。その次は、ヨハネ伝3章36節。31節から見ましょう。

「31上より来るものは凡ての物の上であり、地より出づるものは地の者にして、  
その語ることも地の事なり。天より来るものは凡ての物の上であり。32彼そ  
の見しところ、聞きしところを証したもうに、誰もその証を受けず。

肉なる存在者は、こういう本当の天上の世界のことを語ってもらっても受け付けることが  
できない。水と油みたいなもの。しかしながら、

33その証を受くる者は、印して神を真なりとす。34神の遣し給いし者は神の  
言をかたる、

皆さんそれぞれ、キリストに在って旧きあなた方は死んでいる。新しく生まれたあなた方  
は神よりつかわれた新しい霊的存在者にされている。そして、神の御言を語る。なぜな  
らば、

神、御霊を賜いて量りなければなり。

十字架にかかられたのは、私たちの自我という、神の恵みを受ける邪魔ものを十字架で粉  
砕してくださった。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」

と。そういうものを自分でできないから、キリストがあゝの十字架で我々一人ひとりのため  
に既に成し遂げてくださったんです。だから、もう旧いあなたは十字架で死んでいるん  
ですよ。

「われ主と共に十字架せられたり」

と。十字架せられて生きている人はいないでしょ。しかし、死につばなしか。とんでもない。  
新しい生命を与えてくださった。その新しい生命の中に聖霊さまが宿ってください。その  
聖霊さまがあなたを天界へ、天国へと限りなく導いてくださる。そういうことがこのヨハ  
ネの3章31節から書かれているわけです。

皆さんはそうやって、「神の遣し給いし者」、そういうものに変貌させられて、御言を語る。  
それは、

御霊を賜いて量りなければなり。35父は御子を愛し、万物をその手に委ね給

えり。36御子を信ずる者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、

かえ 反って神の怒〔審判〕その上に止るなり。」（ヨハネ3・31〜36）



キリスト・イエスという方も、神さまが地上に送り給うた最後の切り札だったんです。それまでにいろんな預言者を送られた。しかし全部、預言者は殉教していきました。最後に、これはという切り札として送りこんだのがイエスというお方だった。ところが、この世の者たちは、

「これは最後の敵だ。こいつをやっつければ、天下は俺たちのものだ」

と言って、ボコボコにして殺してしまった。それがこの世の霊ですよ。そういう人間どもは本来ならそれこそ地獄へ行つて当然です。それをキリストは、

「彼らを赦してやってください。彼らは自分のやっつけていることがわからないんです、

駄々っ子なんですから」

と言って、十字架で執り成してくださった。それが十字架上のキリストの祈りですよ。それを本当に真剣に受けとったら、涙が出ますよ。そんな逆らっているやつ、しかもキリストは生きておられる間、どれだけみんなは恵みを受けてきたか。病める者は癒される。いろんなことで苦しんでいる者は解き放たれる。悪霊は外に追い出される。そういった天国の事態をキリストは本当にあの3年間の伝道を通して実際に現してくださった。どれだけ皆は恵みを受けたか。それをいつの間にか忘れ去って、

「十字架につける、十字架につける。バラバをゆるせ！」

と、とんでもないのが人間の業（ごう）というやつですわ。それを主は、

「彼らを赦してやってください。彼らは自分で自分のやっつけていることを今、わ  
からないでいるからです」

と、執り成してくださっているんですよ。そこを本当に受けとったら、涙が出ます。ええ、普通なら、

「あれだけの恵みを受けておきながら、何たる恩知らず、こんなものどもは、神さま、

地獄へ突き落としてやってください！」

と、私だったらそう言います。ところが、キリストは、

「彼らを赦してやってください。彼らは自分のやっつけていることがわからない駄々っ

子にすぎませんから、どうぞ、彼らを赦してやってください」

と、そういう執り成しの祈りをなさった。それを本当に真剣に受けとってごらん。この世の人たちは本当にそこを真剣に受けとったら、ガラッと変わって当たり前ではないですかね。それを本気で受けとる人が少ない。それがこの世の現実でしょ。そしたら、誰がキリストの本当の恵みを証するんですか。皆さんお一人お一人ですよ。

「汝ら我を選びしにあらず。われ汝らを選びたり」

と、キリストは弟子たちに仰った。

弟子たちはキリストに呼ばれたのは、みんな漁師でしたよ。漁師であったときに、イエスが通りかかって、ペテロにしてもヤコブにしても、



「私について来なさい」

と言ってお招きになった。そうすると、網を棄てて、キリストに従ったと、福音書の出だしの所に出てくるでしょ。自分から立候補したのではない。みな漁師さんですから、宗教とは関係がなかった。ところが、そういう宗教とはかかわらない、つまり汚れていない、そういう者たちに、ずぶの素人に目をつけて呼びかけられた。そうすると、彼らは「はいっ！」

と言って従った。我々がやるべきことは、「はいっ」と言って従うことですよ。

「いや、私はまだ従うだけの資格がありません」

とか何とか、恰好をつけていたらダメなんです。

「はい、あなたは呼んでくださって、ありがとうございます！」

と、そういう姿でキリストにすがっていく。

### ●春雨型と集中豪雨型

「<sup>34</sup>神の遣し給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり」

（ヨハネ3・34）

これは皆さんお一人お一人の姿、そういうふうを受けとってください。皆さんお一人お一人は既に十字架につけられて、旧い我は死んでいるんですよ。そして、新しく生み出していただいた。そういう者に対して主は、

「御霊を賜いて量りなければなり」

と。私は永い間、御霊によって祈るとか、御霊によって語るといのがわからなかったんです。小池先生はいつも仰ったですよ、

「私は聖霊をいただいていますから、だからここで語る資格があるんですよ」

と。司会している私は辛かったですね。講演者はそうやって

「私は御霊を受けてますからね」

と言って、胸を張って輝いてしゃべる。司会している私はそんな体験は何もありませんから、シヨボンとしている。そういうことが長いこと続いた。そうしたら、ある時に、

「いや、先生、私は聖霊をいただいているのかさっぱりわからなくて本当に、先生

がいつも御霊と仰った時に、辛いんですよ」

と言ったら、

「奥田君、君が御霊をいただいていないで、どうするんだよ？」

と仰った。

「あつ、そうなんですか!？」

「そうなんだよ」

と。あれはありがたかったですね。



パウロなんかは自我が強かった。キリストに逆らっていた。だから、ガツン！とやられた。引っくり返された。ところが、私は割に素直なものですから、知らないうちに感染していったんです、聖霊に。春雨型と呼びます。集中豪雨みたいにドカン！とくる人は大体、頑固だった人とかね、そういう人にはドカンとくる。ところが、割合に素直な人に対しては春雨のように、知らない間に聖霊が中に宿っておられる。そういうことをそこで初めて気づかされた。ああそうだと。そんな現象面で、

「私は聖霊のバプテスマを受けました！」

ということがなくても、ちゃんと聖霊さまは、心から従っていく者に対していつの間にか宿って、聖霊によって生かしてくださる。そういうことがわかったんです。

人にはいろいろなパターンがありますから、どうぞ一つのパターンにはめ込まないように入ってください。大体、ドカーン！とやられる人は頑固な人ですよ(笑)。素直な人にはスーッと入ってきてくださる。どっちだっていいんですよ。古い己というのは、遺伝的なものもあるし、いろんなもので自分で自分から脱却できない、そういう存在なんですけれども、全部、

「われ主と共に十字架せられたり。もはや我生くるにあらず」

これは共通なんです。

「善きものにも悪しきものにも」

と、それは相対的な問題です。そんな相対的な世界から絶対的なものへとキリストは引き上げてくださっている。それが、

「われ主と共に十字架せられたり。もはや旧き我は生きていない。復活された

キリスト、御霊の生命が私の中に宿ってくださって、私を新しく生まれた者

として導いてくださっている」

と。これが福音書であり、ローマ書であり、それが使徒たちの証言でしよ。

「<sup>36</sup>御子を信ずる者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反つ

て神の怒その上に止るなり。」

御子を信ずる者には永遠の生命がある。御子に従わないというのは、せつかくの恵みを蹴飛ばしているんだから、これはもう神の審判が来たって仕方がないじゃないかと。そういうことですね。

### ●互いに相愛しなさい

それから、ヨハネ伝の17章3節にいきましょう。これは大祭司の祈りの最後のところです。ここも注目しておいてください。16章までは、弟子たちとお別れに際して語られたことが集約されている。そこにある14章から16章までを一挙に語られたとは思いません。けれども、折に触れて語られたことをまとめあげれば、こういった14章から16章の御言につな



がっていくと思う。

その中でも大事なところは、15章で、葡萄の樹と葡萄の枝のことが書いてあって、葡萄の枝が本体である樹につながっていないとダメなんだと。逆につながっていれば、必ず実を結ぶ。そういうことが15章の7節に出てきます。そして、

「そうやってつながっているなら、何でも望みにしたがって求めよ。さらば成るべし」

という、素晴らしい約束があります。15章7節をちよつと見てください。

「7汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随のぞみしたがいて求めよ、さらば成らん〔成るべし〕。8なんじら多くの果みを結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。9父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。10なんじら若もわが誠命いましめをまもらば、我が愛におらん、我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。11我これらの事を語りたるは、我が喜よろこび悦の汝らに在り、かつ汝らの喜悦の満たされん為なり。

そのようにして、多くの実を結ぶことが父なる神さまの栄光となる。そしてあなた方は本当に私の弟子になる。父なる神は私を愛してくださいとさっているように、私もあなた方を愛した。だから、私の愛の中に居なさいと。素晴らしいところですね、この15章は。そういうキリストの恵みの御言の中に日々を送る。これが我々の生き方ですね。

12わが誠命いましめは是なり、わが汝らを愛せしごとく互あひに相愛せよ。13人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。14汝等もし我が命ずる事を おこなわば、我が友なり。15今よりのち我なんじらを僕しもべといわず、僕は主人のなす事知らざるなり。我なんじらを友と呼べり、我が父に聴すべきし凡ての事を汝らに知らせたればなり。

「わが誠命はこれなり。私があなた方を愛したようにあなた方は互いに相愛しなさい。そして、友のために生命を棄てる。それにまさる愛はないだろう。そういう私の誠命を護っていくならば、あなた方は私の友である。もはや弟子ではない。あなた方は僕、弟子だなんて言わない」

「僕」というのは、訳わけがわからなくてただ命令に従っているだけ。これが奴隷の姿でした。しかし、そんなのではないと。

「汝ら我を選びしにあらず、我汝らを選び」

と。皆さん、自分がキリストの御名を呼んで、キリストにつながったというふうにも多分、自覚しておられると思う。けれども、イエスさまの方から、

「そのようにさせたのは私だよ。私があなた方を促して、私を呼ぶようにさせた。だから、あなたが私を呼ぶ前に、私はお前を捕まえていたんだよ」



と、それがここですね。

16 汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選び。而して汝らの往きて果を結び、且その果の残らんために、又おおよそ我が名によりて父に求むるものを、父の賜わんために汝らを立てたり。17 これらの事を命ずるは、汝らの互に相愛せん為なり。」（ヨハネ15：7〜17）

「汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選びたり。目的は、往きて果を結び、しかもその果が豊かに残るために。そして、おおよそ私の名によつて父なる神さまに求めるものを父なる神さまが与えてくださるために、そのためにあなた方を立てたんだ。そしてその命令をあなた方に委ねたのは、お互いに愛しあうことだ」

と。クリスチャンに対してキリストが求められたのはまず、お互いの中に本当の愛が宿っている姿だ。クリスチャンがいがみ合っていたら、全然ダメなんだ。しかし、歴史を見れば、いくつかの派に別れ、プロテスタントとカトリックがまた対立したりとか、いろんな悲しい歴史があります。でも、そうではないと。本当にキリストの弟子であるならば、互いに相愛する。人その友のために死ぬ、それにまさる愛はない。

キリストは、友どころかキリストを誇る者、敵対者のために死んでくださったんです。そういうキリストの愛の姿、それを本気で受けとつたら、お互い愛し合わないではおられないではないかと。しかし、歴史を顧みても、対立のずっと連続でしょ。カトリックとプロテスタントが対立する。いろんな所で対立がはびこつて、本当の意味の和合という一致のところになかなか来ない。残念です。

我々は素人召団ですよ。素人召団で、どこからもいわゆるこの世的な権威とかお墨付きをいただきたい。しかし、我々の中には御霊のキリストが宿っている。本当に

「この友が黙さば、石叫ぶべし」

とキリストが仰つたくらいに、

「素人召団の中に私は本当に宿つて、彼らを輝かせる。彼らこそ私の証人である」

と。そういうふうに、キリストは私たちのことを見てくださっている。それだけの自覚を、皆さん、持っていたいただきたいんです。小池先生は、

「二人一召団、そういう覚悟をもつてやってほしい」ということを仰つた。

「何か群となつてやらないと、何も始まらないということではない。皆さん一人ひとりが御霊を宿して、御霊の力をいただいたら、一人ひとりが兄弟姉妹を生み出していく。そういう力を神さまの側で、キリストの方でくださるんだ」

と。小池先生の讚美歌はそういう角度から歌われていますね。先生が特に1番から10番ぐらまでの間に作られているのはみな素晴らしい。それは全部、先生の告白ですから。それを私たちは、我々の告白としてキリストを証していく。それは、先生を受け継いで福音



を展開していくキリスト道、そういう道を歩む我々の使命だと私は思います。

● 神は愛なり

次に、ヨハネ第一書の4章7〜21節に行きます。

「7 愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。8 愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。

「神は愛なり」というのは、このヨハネ第一の手紙の4章でハッキリ出てくる。それ以外の所で「神は愛なり」なんて出てきてないように思いました。ここで出てくる、「神は愛なればなり」と。

9 神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子（キリスト・イエス）を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。10 愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために有の供物となし給いし是なり。

我々が愛したのではない。神さまの側で我々を愛して、我々と神さまとの間を隔てている自我という邪魔ものを十字架で片づけてくださった。そういうところですね。それが「我らの罪のための有の供物」という言葉で表されています。

11 愛する者よ、斯くのごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがいに相愛すべし。

このように神さまの方から私たちを愛してくださった。そうすると、私たちも互いに相愛せよと。これはヨハネ伝15章で、

「汝ら互いに相愛すべし」

と仰っていました。それがここで出てくるわけです。

12 未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛も亦われらに全うせらる。13 神、御霊を賜いしに因りて、

神、御霊を賜いて量りなければなりと。

我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。14 又われら父のその子を遣して世の救主となし給いしを見て、その証をなすなり。15 凡そイエスを神の子と言いあらわす者は神かれに居り、かれ神に居る。

「イエスは神の子である」と本当に心から宣言する者には、ちゃんと神さまがいてくださる。彼は神の懐にいだかれてあるんだと。

16 我らに対する神の愛を我ら既に知り、かつ信ず。神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神も亦かれに居給う。17 かく我らの愛、完全をえて審判の日に懼なからしむ。

いや私はね、信仰に導かれた頃は、恐かったんですね。今までは神さまのことを知らない



時は何でもないと思つていたことが、聖書の光に照らしたら全部アウトなんです。そういうことを一々気にしたら、なにかもう歩けなくなつた。それこそ引きこもりになつてしまった。それをぶつこわしてくださつたのが、こういつたヨハネの手紙でした。

我等この世にありて主の如くなるに因る。18 愛には懼なし、全き愛は懼を除く、懼には苦難あればなり。懼るる者は、愛いまだ全からず。19 我らの愛するは、神まず我らを愛し給うによる。

愛には懼れなし、全き愛は懼れをとり除いてくださる。懼れには苦しみが伴うんだから、そういう懼れているもの、神さまの前にまだ怖がつている間は、神さまの愛は貰かれない。私たちが神さまを愛するとしたら、それはまず神さまの側で私たちを愛してください。それが原動力となつて、このように愛してください。私たちもお互いに愛し合おうではないかと。ヨハネ伝13章35節では、

「汝ら互いに相愛せよ。それによつて世の人は、あなた方は私の弟子である」ということを知るんだから」  
 ということがちゃんと書かれています。

20 人もし『われ神を愛す』と云いて、その兄弟を憎まば、これ偽者なり。既に見るところの兄弟を愛せぬ者は、未だ見ぬ神を愛すること能わず。21 神を愛する者は亦その兄弟をも愛すべし。我等この誠命を神より受けたり。」（ヨハネ一4:7〜21）

神を愛すると言いながら、兄弟を憎んでいるようでは、これはダメだ、偽者だと。目に見える兄弟を愛さない者は、見えない神さまを愛するなんて在り得ないことではないかと。だから、神を愛する者はまたその兄弟をも愛する。

ここでいう「愛する」というのはもつと具体的だと思う。苦しんでいるならば、助けに出る、担いあげる、そういう具体的な姿を通して、兄弟を助けていく、担つていく、それが本当の愛の姿だと思います。そういう誠命を神さまからいただいた。

ヨハネ第一書5章も続けて読んでいきます。

「凡そイエスをキリストと信する者は、神より生れたるなり。」

今だったら当たり前だと思えますけれども、当時はまだイエスというお方がそういうお方であるということが確立していない。そういう中で、この方こそが本当に神さまから遣わされた救い主であるという、「神、御霊を賜いて量りなければなり」といったことを実証していくのは、とても難しかったであろうと思う。

おおよそ之を生み給ひし神を愛する者は、神より生れたる者をも愛す。

おおよそイエスをキリストと信する者は神から生まれたんだと。その生まれてくださった神を愛するという人は、神から生まれた兄弟姉妹たちを本当に愛せるはずだと。

2 我等もし神を愛して、その誠命を行わば、之によりて神の子供を愛するこ



とを知る。

我らもし神を愛して、その誠命を行うならば、本当に神の子である、自分たちが神の子とせられたということがハッキリしてくるんだと。

<sup>3</sup>神の誠命を守るは即ち神を愛するなり、而してその誠命は難<sup>かた</sup>からず。<sup>4</sup>おおよそ神より生るる者は世に勝つ、世に勝つ勝利は我らの信仰なり。<sup>5</sup>世に勝つものは誰ぞ、イエスを神の子と信する者にあらずや。

もう今から言えば当然のことですけれども、さつきから申してますように、まだイエスがそういうお方だということが確立されていない。むしろ、イエスは異端者であるとして十字架にかけられて殺されたわけですよ。そういうお方が神の子だ、救い主だということを信ずることは、大変な勇気が要ったはずで、迫害を受けたはずで、その中でこういった手紙が書かれている。励ましが与えられている。そういうように私は思いますね。

<sup>6</sup>これ水と血とに由りて来り給いし者、即ちイエス・キリストなり。營<sup>ただ</sup>に水のみならず、水と血とをもて来り給いしなり。<sup>7</sup>証<sup>あかし</sup>する者は御霊なり。御霊は真理<sup>まこと</sup>なればなり。<sup>8</sup>証する者は三つ、御霊と水と血となり。この三つ合いて一つとなる。」(ヨハネ15・1〜7)

この「水」というのはやはり「水のバプテスマ」のことを指しているのではないかと思えますけれども。私たちはいわゆる「水のバプテスマ」とか、そういった儀式はいたしませんけれども、私たちの自覚は常に、

「われ主と共に十字架せられたり。もはや我生くるにあらず。復活された御霊のキリストさまが新しく生まれた私たちの中に在って生きたもうなり」

と、そういうパウロのガラテヤ書2章20節の告白、それをわが告白として御名を讃えつつ歩んでいく。これが私たちの在り方です。そして、キリストの最大の誠命<sup>いましめ</sup>は、

「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに相愛しなさい」

と、そういうことを仰った。それがヨハネ伝の14章から16章の中の一つの柱になってますから、そういうところをあとでゆつくりとお読みくださいますように。

### ●弁慶の仁王立ち

それから、ローマ書8章31節〜39節。ローマ書自身が非常に素晴らしい証言の書でありますけれども、その中のピークは8章なんです。8章31節からがまた8章の一番しめくくりということになります。8章全体が、3回くらいに分けて集会をやってもいいくらいの内容なんです。けれども、今日はそんなことは出来ませんから、大事な所だけを取り上げるわけです。26節からは昨日の祈り会でも申しました。

「<sup>26</sup>斯くのごとく御霊も我らの弱<sup>よわ</sup>を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難<sup>なげ</sup>き歎<sup>なげ</sup>（呻<sup>なげ</sup>き）をもて執成<sup>とりな</sup>し給う。」



御霊みずから言い難き呻きをもって執り成してくださっている。そして、神さまの方ではそういう御霊の呻きをしつかり受けとつて、私たちのために善きことをなさつてくださる。

27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に  
適いて聖徒のために執成し給えばなり。

御霊は神の御意にかなつて聖徒のために執り成してくださる。ありがたいお方である。

28 神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと

相働きて益となるを我らは知る。(ロマ8・26〜28)

神を愛する者、すなわち御旨によつて召されたる者には、一切のことが相働きてプラスとなつていく。そのことを私たちは知っている。クリスチャンにとつては、どんなにマイナスと見えることも全部プラスに切り替わつていく。それだけの積極的なそういう信を与えられているんです。決して絶望してダウンしない。それだけは本当に、皆さん、肝に銘じて、「ごっつい、私は生きています」

と。昨日もパウロの手紙で言いましたね、コリント後書だったかな、そこで、

「死んでいるようでも、なお生きています。われこの土の器に宝を持てり。御霊

という宝を持つている。それによつてどんなことがあつてもへこたれない。

倒されても亡びず」(コリント後4・7以下)

という、あのパウロの盛んなる勝利宣言、それを私たちはしつかりいただいていきます。

この8章31節からをフオーロしますと、

「31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。

神さまが味方でありたもう以上、敵対者はいないじゃないかと。

32 己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて  
万物を我らに賜わざらんや。

御子キリストを惜しまずして私たち全てのために遣わしてくださつたお方、あなた方一人ひとりのために御子キリストをくださったお方が、御子をくださっただけではない、万物をくださる。いやいや、御子キリストをいただくだけでも大変な恵みであるのに、そこへまた添え物がついている。万物をくださる。そういう鴻大なる福音ですね。

33 誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。34 誰か之を罪に定め  
ん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に  
執成し給うなり。

神の選びにあずかつたあなた方は、サタンが

「あいつはまだこんな点がダメですよ、あいつはまだこんな不信仰がありますよ」

と、ことごとくそういうクリスチャンの欠点を見出しては、神さまに対して論告求刑をしていく、まあ検察官の役目みたいなことをやっているわけですね。それに対してキリスト



は体を張って護りたもう。

その体を張っている姿を表してくれたのは弁慶べんけいですよ。弁慶の仁王立ちにおうというあの姿を、皆さん、思い起こしてください。どんな飛んでくる矢も全部、自分が受けとめて、背後におられる義経よじつねを護った。あの姿。ああ、弁慶というのは素晴らしいですね。我々はそういうふうにして御子キリストに護られてある。御子キリストが一切の罪をご自身で背負ってくださいました。サタンが、

「あいつはまだ信仰がうすいですよ、あいつはまだこんな欠点があります」

と、いろんなことを言って、揺さぶってくる。それを全部キリストはしつかと受けとめて全部跳ね返してください。それがキリストのお姿ではないですか。

だから、そういうキリストが味方でいてくださる。敵対者はいないんだよ。キリストをくださっているだけではない。万物を私たちにくださる。神の選びたもうた、そういうあなた方を訴えるやつは誰だ。神さまはその人たちを義としたもう。「義とする」ということは「受け入れてくださる」ということです。

「大丈夫だよ、心配いらんよ」

と言って受け入れてくださる。それが

「義としたもう」

ということ。

「いったい誰が彼を断罪するのだ。このイエスは神の右にいまして執り成しの祈りを今も捧げてくださっている。こういうキリストに表れた神の愛、キリストの愛、これから引き離すものは天上天下、何もない」

という、この勝利宣言。これを皆さんはご自分のものとしてしつかりと受けとって、

「何が来ようと大丈夫だ、絶対大丈夫だ」

と、そういう姿で貫いていただきたいんです。それには、日々の祈りが大事です。

<sup>35</sup>我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、<sup>36</sup>患難か、<sup>37</sup>苦難か、<sup>38</sup>迫害か、<sup>39</sup>飢か、<sup>40</sup>裸か、<sup>41</sup>危険か、<sup>42</sup>剣か。<sup>43</sup>録して『汝のために我らは、<sup>44</sup>終日、<sup>45</sup>殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。<sup>46</sup>されど凡てこれら<sup>47</sup>の事の中にありても、我ら<sup>48</sup>を愛したもう者に頼り、<sup>49</sup>勝ち得て余あり。

この世のいろいろな苦難、それをここに列挙しています。しかし、どんなことがあるようと、私たちが愛してくださったお方、神・キリストによつて勝ち得てあまりあり。

「何とかぐり抜けて、命からがら私は生きています」

なんて言わせない。勝ち得てあまりあり。お釣りがたくさん出てくるよと。そういうふうな盛んなる姿、それをここで勝利宣言してくれています。

<sup>38</sup>われ確かたく信ず、死も生命も、

即ち、相対的なこの地上の生命、それにこだわったらダメだと。そんなものを乗り越えて、



天上の生命、ひとつ次元の高い生命、これをいただいている。これが「永遠の生命」です。今日の主題です。それをいただいているんです。

● 私たちは二重国籍者

だから、私たちは二重国籍者なんです。一方ではこの世に属する者として、この世のいろんな法則の中でいきます。と同時に、天上人として天の道をまた踏みしめて歩いていく。そういう二重の生活をしているんですね。普通の人は一重の生活ですよ。でも、我々は二重の生活をしています。

「我らの国籍は天にあり」（ピリピ3・20）

と書かれています通り、そういうことでありますから、皆さん、本当に胸を張って、御名を讚美して、

「アーメン、ハレルヤ！ あなたの御名に栄光を帰し奉ります。万歳！ いつどこで仆れようが大丈夫だ」

と。そういう心意気をもって本当に輝いて、皆さん、生きていってください。

だから、どんなことがあるうとも、

「私たちを愛してくださる方によって勝ち得てあまりあり。かろうじて生きているのではない。お釣りがたくさん出てくるよ」

と、そういう生き方をしている。

<sup>38</sup> われ確く信ず、死も生命も、

相対的な死とか生命とか、そんなものではないと。それからまた、霊的な次元のどんなものをもつてきても、

御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、<sup>39</sup> 高きも深

きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛

より、我らを離れしむるを得ざることを。」（ロマ8・31〜38）

「我らの主キリスト・イエスにあるこの神の愛から我らを離れしむることはできない」

と。神の愛とは、抽象的なものではない。キリスト・イエスの中に表れた、そういう神の愛。キリスト・イエスは我々に代わって一切をなしてくださいました。そういうものをしっかり受けとって、

「主と我とは一つなり」

と。小池先生も、

「エン・クリスト」

ということを仰った。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに。われとキリストとは一つなり」



と。イエスが、

「神と私は一つなり」

と言ったら、

「神を冒瀆するものだ」

と、パリサイ人は怒ったんですけれども、冒瀆どころか、それがキリストの本当の姿です。私たちも、旧き私たちは既に十字架で贖われて、新しい私たちをいただいた。その中には御霊のキリストが生きて働いてくださっている。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや我生くるにあらず。御霊のキリスト、復活のキリスト、そのお方が私のうちに働いて、私を限りない永遠の生命の世界、天上の世界へと導いてありたもう」

と。それが私たちの告白です。だから、

「天上天下どんなものをもつてきても、キリスト・イエスにおいて頭してください」

た神さまの愛、そこから引き離すものは断じてありえない」

という、神の愛の勝利宣言。これを私たちはいただいているんです。

おおよそ、福音書であろうと、パウロの書簡であろうと、みな私たち一人ひとりに語られている。そういうふうにして、現在、我々に直に語られている言葉として、「ありがとうございます」と言つて受けとつていく。それが本当の受けとり方ですね。過去の事実として

「こうだった、ああだった」

と、それは聖書研究者に任せておいたらいい。聖書研究やつても、何も出てきません、本当の生命は。我々は、

「われを食らい、われを飲め」

という、そういう実践的なものです。そうでしょ。お医者さんがいくら医学の知識があるうと、それだけではお医者さんはできないわけです。我々もそうです。天国の研究をしたりしても、聖書の研究をしても、それで私たちは生きるわけではない。唯一の御霊であるキリストをしつかり受けとつて、そして、私たちは日々、主に在つて御霊をいただいで生きていく。そういう生き方、それがこのローマ書の8章の終りの方でパウロが言われていることではないでしょうか。だから、何をもちだそうと、

「我らの主キリスト・イエスにある神の愛から、我らを引き離すものは天上天

下ありえない」

という勝利宣言です。

### ●愛の讃歌

それを私は昨日、ペテロ書をちよつと引用しました。もう一度、ペテロ第一の手紙を見てください。そのペテロ前書の1章3節から読んで終わりたいと思います。



「3 讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大なる憐憫に  
随したがい、イエス・キリストの死人の中より甦うちえり給えることに由より、我らを  
新あらたに生れしめて生ける望のぞみを懐いだかせ、

その大いなる憐れみにしたが、イエス・キリストさまを死人の中から復活させてくださ  
った。それによって私たちも新たに生まれ、そして生きられて、本当に生きた望みを私た  
ちに与えてくださいました。そして、

4 汝らの為に天に蓄たくわえある、朽くちず汚けがれず萎しぼまざる嗣業しぎようを継つがしめ給えり。

天に蓄えてある、朽ちず汚れず萎まない天国を受け継ぐに価するものにしてくださいまし  
た。ありがとうございます。そして、

5 汝らは終おわりのときに頭あたまれんとて備そなわりたる救を得んために、信仰によりて神の  
力ちからに護まもらるるなり。6 この故に汝ら今しばしの程ほどさまさまの試練こころみによりて憂うれ  
えざるを得ずとも、なお大おおに喜よろこべり。7 汝らの信仰の験たましは、壊くつる金の火に  
ためさるるよりも貴たかくして、イエス・キリストの現れ給うとき誉ほまれと光栄と  
尊貴とうぎとを得うべきなり。8 汝らイエスを見しことなけれど、之を愛し、今見ざ  
れども、之を信じて、言こといがたく、かつ光栄ある喜よろこびをもて喜ぶ。9 これ信  
仰あがの極はて、すなわち靈魂たましひの救すくいを受くるに因よる。」(ペテロ前1:3~9)

あなた方は、終わりのときに頭れるという救い、それを得るために、今、信仰によつて  
神の力に護られてある。だから、あなた方はこれからもいろんな試練にあつて、多くの憂  
いがあるあなた方を包むことがあるだろう。でも、にもかかわらず、あなた方は現に大いに喜  
んでいるではないか。ちやうど金が純金になるためにはいろんな試練を通つて、そして本  
当の純金というものに鍛えられていく。それと同じように、いろんな試練を通してあなた  
方は純化されていく。だから、試練、苦しみ、いろんなものが襲つてきても、それを異な  
ることと思わず、

「いや、神さまから見捨てられたのではないかな」

なんて、絶対に思うな。あなた方を鍛え上げて、あなた方を本当の天国人にしようとして  
くださっているんだと。

昨日も引用しました。

「あなた方が遭つた試みも尋常のものだ、未だかつてなかったなんていうことでは  
ないんだよ。試練と共に逃れの道を神は用意してくださっている」

ということを昨日も申しました。そのようにして、我々もそういうキリストのことを、  
「栄光の姿を既にうちに宿して、言い難く、光栄ある喜びをもつて喜んでいて。こ  
れは即ち、あなた方がもう救われて、神の子とされている何よりの印ではないか」  
と。そういうことがこのペテロ前書の言葉ですね。

愛のいろいろな姿は、コリント前書の13章にあります。もう時間がきましたので、そ



れは省略しますけれども、

「愛は寛容にして慈悲あり、愛は情け深い、愛は誇らない、己の利を求めない……」

という、ああいう素晴らしいところは、「愛の讃歌」ということで、コリント前書13章にあります。あれをどうぞ、皆さん、また味わってください。そして、あそこへ、「愛は寛容にして」という「愛」に、自分を入れてください。キリストを入れたら、

「あつピッタリだ」

と。自分を入れたら、

「ちよつとおこまがしいな」

と。旦那さんを入れる。奥さんを入れる。そうやって、いろんな人を入れていく。

「ああ、ピッタリだよ」

と言ったら素晴らしい。

「いや、ちよつと褒め過ぎだな」

なんて、いろいろあるでしょう。けれども、あの「愛の讃歌」は、

「愛は寛容にして慈悲あり、愛は情け深い……」

あれをキリストはお一人お一人において誠に成就したもう。あれを書き抜いて壁に貼り付けて、何かあつたら、

「あれをちよつと見てごらん。あなたの本当の姿はあれだよ。今はひねくれて怒っているけれども、それは本当の姿ではない。あなたの本当の姿はここに書かれてい るんだよ」

「ああ、そうか、わかつたよ。はい、仲直りしましょうね」

なんて。まあそういうふうなことで、御言が生き生きと、ご家庭において、皆さん一人ひとりの日常生活の中で生きている姿、それを私は願っています。それを証するんです。その根底にあるのは、

「われ主と共に十字架せられたり。もはや旧き我、問題だらけの我、それは生きていません。十字架でもう片づけられています。そして、あの復活されたキリスト、あの素晴らしい生命が私の中で生きて働いてくださっている。それが私の本当の生き方なんです。アーメン、ハレルヤ！」

はい、それではこれで終わることにいたします。終わりに短く祈ります。

### ● 祈り

主さま、ありがとうございます。短い一泊二日の特別集会でありましたけれども、兄弟姉妹をそれぞれの所からあなたが呼び出してくださり、ここで御言・御霊・祈りを一つに



して時を過ごすことができました。本当にありがとうございます。

主さま、どうぞ、これからまた、それぞれの所に帰って行きますけれども、昨日からいただいたこの恵み、御力、御霊の力をしっかりとうちに宿して、どんなことがあってもへこたれない。あなたの御名のご栄光が現れますように。あなたは本当に私たち一人ひとりを抱きかかえて、

「大丈夫だ、私を信じて歩みなさい」

と、いつも後ろからプッシュしてくださって、支えて、担って、そして前進する力をくださいます。私たちには祈りをする特権を与えられています。そして、

「祈りたることは既にかなえられたりとせよ」

と、あなたは約束してくださいました。

だから、私たちが祈りますときに、いつも

「あなたの御言はこうですから、だから、御言にすがって私は祈りをお捧げします。

立派だから祈るのではありません。でき損ないであろうと、何であろうと、あなたは私を既に十字架で亡ぼして、新しい生命をくださった。新しく生まれた私はあなたの幼児として御言にすがり、そして、祈りを捧げます。どうぞ、御名のゆえに、祈りを受け入れてください。それを感謝いたします」

と。そういう祈りを捧げてほしいね。躊躇する前に先ず祈った方がいいです。困ったことがあったら、「主さま、助けてください」と。それでいいです。そういう単純率直な信、これが「幼児の信」です。

「幼児の心で生きなさい」

と言われた。私たちは主にある幼児です。そして、御言・御霊によつて成長していきます。やがて、このからだを脱ぎ捨てた時に、そこに忽然として栄光の姿がお一人お一人に顕れてくる。それをキリストはお迎えくださる。そして、先に召された者たちは、そこで輝いて待っていてくれる。そういうイメージを私はいただいています。

私は皆さんの中では最年長かもしれないけれども、皆さんお一人お一人がそのようにしてこの地上に生きている間に本当に天の生命をいただいて、変質変貌して天へ昇っていく、そういう旅路。「わが道伴れわが情け」という小池先生の讚美歌もありますけれども、私たちはそのようにして新しい生命をいただいて、天上への旅を続けていく、そういう旅人たちであります。キリストは、

「汝ら、互いに相愛せよ。私があなた方を愛したように、そのようにあなた方

も互いに愛し合いなさい」

と。ただ一言、一つの命令、それは

「愛し合いなさい」

と、これだけです。



## 「愛にある者は神に居る」

と、またヨハネが手紙の中で言ってくれました。そのように、福音の最後の言葉は「愛」でした。それもキリストがご自身を献げてくださった、命懸けで私たちに表してくださいました。それが愛です。そういう愛に包まれ、貫かれ、担われて、私たちはこの地上の旅路を歩んで行きます。単純率直に御名を讃えつつ、兄弟姉妹互いに愛し合って歩んで行こう。それが主さまの私たちに對する御思い、ご命令だと思えます。どうぞ、またこの特別集会を通して新たにされて、また新しい一歩を、皆さんお一人お一人が踏み出して行ってくださいるように、お祈りいたします。

主さま、感謝いたします。この感謝・讃美・祈りを兄弟姉妹の祈りと共に御名に在って今、御前にお捧げいたします。アーメン。

